

お金はほしいが、働くのはイヤだ。こういうたわけた考えをもつ者がいる。わたしもその一人だ。

わたしの父は違った。父は商人で働きた者だった。二十代で一生遊んでいけるだけの金を稼いだ。そしてその数年後に興味本位で株に手を出して全財産を失った。そのとき、「株はもうやるまい」と固く誓い、一心に働いた。そして築いた財産を再び株で失った。これをもう一度繰り返し、そのたびに「株はもうやるまい」と誓い、結局、死ぬまで株はやめなかった。人間はいくら失敗しても学ばないものだ。

血は争えないもので、わたしも学生のころパチンコに夢中になった（働きの部分は受け継がなかった）。ギャンブルの怖さがよく分かっている父は本気で心配し、一向にやめようとしないうわしの様子を見かねて、「一回だけ金を出してやるから、パチンコはこれで最後にしろ」と言い、パチンコのし納めをすることになった。

わたしは父の前で、せめて最後ぐらいは勝とうと思って全力を尽くしたが、結果はいつものように惨敗だった。ふだん「パチンコは勝負が小さくてバカらしい」と言っ



絵・江口修平

失敗の教訓

土屋賢二

ていた父は、それを見て異常にくやしがり、「もつとやれ」と言った。

次々に金をつぎこんだが、結局、負けを大きくしただけだった。親子そろって敗北感にまみれて店を出たが、そのときもう一回やろうと提案したら、きっと次の日に再挑戦することに全員一致で決まったと思う。

それがパチンコをした最後になった。はずだったが、血は争えない。その上、人間は失敗しても学ばない。数日後に第二期が始まり、第五期まで続いた。

もちろん父は「株には絶対に手を出すな」と何度も警告した。だが血は争えない。わたしは就職すると株を買い、買った株はことごとく下がった。証券会社が「特別情報」として教えてくれたどこか知らない国の国債を買って元本割れの損をこうむった。為替の専門家のすすめで預金の大半をドル預金にしたとたん、円高になって大きく損をした。

いくら失敗から学ばないといっても、これだけ失敗するとさすがに学ぶものだ。これまでの失敗から学んだ貴重な教訓は「働かずに金は得られない。六十歳までは」だ。

つちや・けんじ●1944年岡山県生まれ。東京大学文学部哲学科卒。お茶の水女子大学教授。専門はギリシャ哲学と分析哲学。著書に哲学書『ツチャ教授の哲学講義』（岩波書店）のほか、ユーモアエッセイ集として『われ笑う、ゆえにわれあり』（文春文庫）など多数。

